

10年後の平成8年に歯科臨床研修が法制化された。その初年度の平成9年4月から、本学口腔外科で行われた旧ストレート方式の歯科臨床研修を経験する事ができた。

過去9か月間の研修内容をふりかえると、外来診療の見学、基本的な診査法と、その意味の据え方を学ぶことから始まった。その後、指導医の下で外来・病棟・手術室の診療にスタッフとして参加し、少しずつ診療を体験しながら、術前・術中・術後の管理、偶発症、経過観察の方法と要点などについての指導を受けた。現在も更に、指導医の監督下で外科的歯科治療のアシスタント、あるいは術者としてこれらの研修内容を続行するとともに、指導医の出張先に行き、保存・補綴分野を含む一般歯科の研修も行っている。以上のような口腔外科での研修により、理解しつつある事は、どのような診療も全て基本の上に成り立っているという事である。

自己の歯科臨床研修をふりかえると同時に、現在の歯科臨床研修がどのような状況なのか、全国の主な私立歯科大学・歯学部と本学を比較し、本学の歯科臨床研修の問題点等を考察してみた。平成9年度の歯科医師国家試験合格者のうち、55.9%が研修歯科医を選択し、その中で国公立大学出身者から研修歯科医を選択した者の割合は、私立大学出身者のそれを大きく超えていた。また、本学の研修歯科医数は全国の私立大学の中でも特に少ないことがわかった。研修歯科医志望者の数は、研修施設の歴史の深さ、症例数、地理的条件、ひいては研修歯科医に求められる経済的環境などによって左右されることが示唆された。本学においては、新卒歯科医に向けた、研修内容、研修後の進路、研修中の生活設計などの具体的な情報が不足しているといえるだろう。

### 3. 北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座における静脈路確保相互実習の検討 —実習成果・痛み・不安に関する評価—

○大桶 華子, 工藤 勝, 河合 拓郎,  
加藤 元康, 佐藤 雄季, 片桐 和人,  
國分 正廣, 新家 昇  
(北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座)

《目的》当講座歯学部臨床実習に取り入れている静脈路確保相互実習に伴う痛み・不安・実習成果を検討し、臨床実習成果の向上と、臨床における疼痛および不安の軽減にフィードバックするため本研究を行った。

《方法》静脈留置針を用いた静脈路確保実習を、'96, '97年度歯学部臨床実習生185名に行った。実習部位は肘窩、橈骨遠位端部、手背の3部位、3群とした。右腕の静脈確保に同一教員がデモを実施し、その直後左腕同部位で相互実習を施行した。実習評価は駆血時・穿刺時・留置時に、痛みをVisual Analogue Scale; VAS(0~100点)で行い、状態不安には顔不安スケール; FAS(0~5得点)を用いた。自記式心理テストである状態-特性不安尺度; SATIの得点(20~80得点)で特性不安(不安になりやすい性格傾向)と実習開始直前の状態不安(刻々変化する不安状態)を評価した。なお、高得点ほど、VASは強い痛み、FAS・STAIでは高い不安と評価される。また、一度の穿刺で静脈路確保した成功率を検討した。

《結果》特性不安は平均43.8得点、実習開始直前の状態

不安では平均49.1得点と不安が高い傾向を示した。痛みは平均でデモ/相互実習の順に、駆血時11.9/11.3点、穿刺時38.8/50.0点、留置時38.8/46.4点となった。また、状態不安は1.3/1.2得点、2.2/2.5得点、2.2/2.4得点であった。肘窩で最も弱い痛み(穿刺時36.0/45.8点)と低い不安(穿刺時2.0/2.3得点)を認めた。全体の平均成功率はデモ84.9%、相互実習64.9%であり、肘窩がデモ90.3%、相互実習75.8%と最も高い成功率を認めた。特性不安の高い学生群と普通の群との比較では、高い群における痛み・状態不安がデモ・相互実習ともに強かった。

《考察》特性不安の高い学生では不安により痛み閾値が低下したと推察される。今後は実習の痛み・不安軽減と成功率向上のため、事前にシミュレーション実習が必要である。

《結語》痛くなく、確実な静脈路確保を行うためには肘窩を第一選択すべきである。